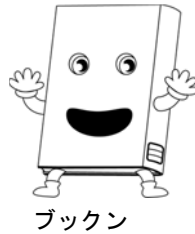


# としょしつ 図書室だより



平成 28 年 1 月 13 日

横浜市立中村小学校  
校長 中川和幸  
学校司書 青木美佳

No. 9

～新しい年がはじまりました。本を手にしてみましょう。～



1月のテーマ

心も新たに  
心温まる本に  
ふれよう～

2016年がはじまりました。今年もたくさんの本との出会いを通し、実りの多い一年になりますように。

さて、今年の干支は申ですね。みなさんがよく知っている十二支「子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥」は、もともとは中国で12年で天を一周する木星の位置を示す数を、わかりやすく動物にかえたのが始まりだそうです。神さまの所に出向いた順で決まったという民話もあります。猫は、翌日に神さまの所へ行ったので、十二支に入らなかったとありますが、タイやチベットなどでは十二支に猫が入っている国もあるそうです。図書室にも十二支の本があります。ぜひ調べてみてください。

## クイズ「まばたき」の語源はなに？

(語源とは・・・どうしてそのような名前がついたのかという理由のこと。その理由について考えてみましょう。) 次の中から「まばたき」のもとになった言葉をえらびましょう。(答えはプリントの裏)

- A: 「目」と「はたく」が合わさってできたことばで、目をぱちぱちはたくことを意味している。
  - B: 「目」が鳥のように羽ばたくという意味からできたことば。
  - C: 「まば」とは「目が」という意味。「たく」とは「動く」という意味。このふたつが合わさってできたことば。
- \* 出典: 「まんがで学ぶ語源」山口理著 国土社より抜粋



ひゃくにんいっしゅたいかい  
百人一首大会

があります!

1月28日(木)・29日(金)

中休み(当日は体力づくりの予備日です。どちらかあいている方に参加しましょう。) くわしくは、階段の掲示板や図書室にはりだします。

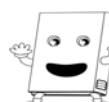


冬休み前に借りた本は、早めに返却してください。

今月の作家

～ 椋 鳩十 ～ 1905年1月22日～1987年12月27日

本名は久保田彦穂。長野県に生まれ、牧場を営む家族の中に育ち、幼いころより動物に親しみます。法政大学卒業後、鹿児島で教師をしながら子どものための本を多数書きました。代表作『片耳の大シカ』『マヤの一生』『月の輪グマ』では動物の動きがとても丁寧に描かれています。5年生の教科書には『大造じいさんとガン』が載っている。  
..... 図書室にも特設コーナーがあります。ぜひ、見に来てください。



お正月の行事

～書初め～

書初めとは、年が明けて初めて毛筆で書や絵をかく行事です。もともとは宮中で行われていた行事でしたが、江戸時代になると庶民にも広がりました。

書初めでかいたものは左義長(火のお祭り)で燃やし、その炎が高く舞い上がるほど字が上達すると言われていたそうです。

## 1月の図書室特設コーナー

今年<sup>ことし</sup>は比較的<sup>ひかくてき</sup>あたたかい冬<sup>ふゆ</sup>ですが、それでも毎日<sup>まいにち</sup>寒い<sup>さむい</sup>日<sup>ひ</sup>が続<sup>つづ</sup>いています。

そんな時<sup>とき</sup>だからこそ、心<sup>こころ</sup>が温<sup>あたた</sup>まる本<sup>ほん</sup>を用意<sup>ようい</sup>し、図書室<sup>としよしつ</sup>に展<sup>てん</sup>示<sup>じ</sup>していきます。毎日<sup>まいにち</sup>変<sup>か</sup>わるおすめの心<sup>こころ</sup>が温<sup>あたた</sup>まる本<sup>ほん</sup>をぜひ読<sup>よ</sup>んでみましょう。

## オープンスペースでは・・・

読書<sup>どくしょ</sup>感想<sup>かんそう</sup>画<sup>が</sup>を掲<sup>けい</sup>示<sup>じ</sup>しました。  
各<sup>かく</sup>学<sup>がく</sup>年<sup>ねん</sup>のみなさんの代<sup>だい</sup>表<sup>ひょう</sup>の絵<sup>え</sup>をぜひ見<sup>み</sup>に來<sup>き</sup>てくだ  
さい。

## クイズ「まばたき」の語源<sup>ごげん</sup>は・・・

答え<sup>こたえ</sup>は、A

まばたきの回<sup>かい</sup>数は、子<sup>こ</sup>どもで一分<sup>いっぷん</sup>間<sup>かん</sup>につき約<sup>やく</sup>15回<sup>かい</sup>、  
大人<sup>おとな</sup>では15回<sup>かい</sup>～20回<sup>かい</sup>程度<sup>ていど</sup>だそうです。

まばたきしている間<sup>あいだ</sup>は、脳<sup>のう</sup>の一部<sup>いちぶ</sup>が停<sup>てい</sup>止<sup>し</sup>していて、  
まばたきしたことを覚<sup>おぼ</sup>えていないのは、そのため<sup>ため</sup>だとい  
言<sup>い</sup>われています。

「目<sup>め</sup>」を「ま」と読<sup>よ</sup>むことがあります。たとえば・・・

- ・まつげ
- ・まゆげ
- ・まなこ
- ・まゆつば
- ・まのあたり
- ・まばゆい
- ・まぶしい
- ・まなざし



・・・みなさんは、いくつ知<sup>し</sup>っていますか？

上<sup>かみ</sup>の句<sup>く</sup>

巡<sup>めぐ</sup>り逢<sup>あ</sup>いて 見<sup>み</sup>しやそれとも わかぬ間<sup>ま</sup>に  
雲<sup>くも</sup>がくれにし 夜<sup>よ</sup>半<sup>わ</sup>の月<sup>つき</sup>かな

下<sup>しも</sup>の句<sup>く</sup>

作者<sup>さくしや</sup>：紫<sup>むらさ</sup>式<sup>しき</sup>部<sup>ぶ</sup>

## ～懐<sup>なつ</sup>かしい教<sup>きょう</sup>科<sup>か</sup>書<sup>しょ</sup>シリーズ 第八<sup>だい</sup>弾<sup>だん</sup>～

ちからたろう  
『力<sup>ちから</sup>太郎<sup>たろう</sup>』 いまえ よしとも作<sup>さく</sup>

\*光<sup>みつ</sup>村<sup>むら</sup>ライブラリー『花<sup>はな</sup>いっぱいになあれ ほか』より

こんび(垢<sup>あか</sup>)から作<sup>つく</sup>られた人<sup>にん</sup>形<sup>ぎよう</sup>は、何<sup>なん</sup>年<sup>ねん</sup>かたつと力<sup>ちから</sup>太郎<sup>たろう</sup>  
に成<sup>せい</sup>長<sup>ちよう</sup>しました。力<sup>ちから</sup>太郎<sup>たろう</sup>は自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>の力<sup>ちから</sup>がどれだけ人<sup>ひと</sup>の役<sup>やく</sup>  
にたつかをためすため、旅<sup>たび</sup>にでます。

そこで力<sup>ちから</sup>太郎<sup>たろう</sup>が手<sup>て</sup>にした宝<sup>たから</sup>とは・・・？



## ひやくにんいっしゆ 百人一首<sup>ひやくにんいっしゆ</sup>あれこれ・・・

◆百人一首<sup>ひやくにんいっしゆ</sup>とは、百<sup>ひやく</sup>人の歌<sup>か</sup>人<sup>にん</sup>の和<sup>わ</sup>歌<sup>か</sup>を一<sup>いっ</sup>首<sup>しゆ</sup>ずつ集<sup>あつ</sup>  
めたものです。

◆百人一首<sup>ひやくにんいっしゆ</sup>はおよそ 800年<sup>ねん</sup>ほど前<sup>まえ</sup>に藤<sup>ふじ</sup>原<sup>はらの</sup>定<sup>てい</sup>家<sup>か</sup>とい  
う人<sup>ひと</sup>が選<sup>えら</sup>びました。

◆百人一首<sup>ひやくにんいっしゆ</sup>は、遊<sup>あそ</sup>びとして広<sup>ひろ</sup>まりました。  
・・・百人一首<sup>ひやくにんいっしゆ</sup>は五<sup>ご</sup>・七<sup>しち</sup>・五<sup>ご</sup>・七<sup>しち</sup>・七<sup>しち</sup>の31文字<sup>もじ</sup>の  
うたです。「五<sup>ご</sup>・七<sup>しち</sup>・五<sup>ご</sup>」までを上<sup>かみ</sup>の句<sup>く</sup>、残<sup>のこ</sup>りの「七<sup>しち</sup>・  
七<sup>しち</sup>」を下<sup>しも</sup>の句<sup>く</sup>といい、かるた遊<sup>あそ</sup>びでは、読<sup>よ</sup>み手<sup>て</sup>（読<sup>よ</sup>  
む人<sup>ひと</sup>）が全<sup>ぜん</sup>体<sup>たい</sup>を読<sup>よ</sup>み上<sup>あ</sup>げ、下<sup>しも</sup>の句<sup>く</sup>だけ<sup>だけ</sup>が書<sup>か</sup>かれた取<sup>と</sup>  
り札<sup>ふだ</sup>をとります。

・・・百人一首<sup>ひやくにんいっしゆ</sup>を読<sup>よ</sup>んだり覚<sup>おぼ</sup>えたりすることで、昔<sup>むかし</sup>  
の日本<sup>にほん</sup>人<sup>じん</sup>が何<sup>なに</sup>を見<sup>み</sup>て美<sup>うつく</sup>しさや切<sup>せつ</sup>なさを感じ<sup>かん</sup>じたのか、  
あじ味<sup>あじ</sup>わってみましょう。



じつ ひと こい  
実<sup>じつ</sup>は人<sup>ひと</sup>を恋<sup>こい</sup>  
るうたがとて  
も多<sup>おほ</sup>いんだ。

図書室<sup>としよしつ</sup>に百人一首<sup>ひやくにんいっしゆ</sup>のかるたがあります。

いっしょにやりましょう。

